

氏 名 (本籍) ^{わし}鷺 ^{やま}山 ^{じゅ}樹 ^{しん}心 (大阪府)

学 位 の 種 類 文学博士

学 位 記 番 号 乙第23号

学位授与の日付 昭和59年12月25日

学位授与の要件 学位規程第3条第2項

学位論文題目 上田秋成の文学と思想に関する研究

論文審査委員 (主査) 文 学 博 士 山 本 唯 一
 (副査) 文 学 博 士 北 西 弘
 (副査) 文 学 博 士 堅 田 修
 (副査) 文 学 博 士
 園 田 学 園 国 崎 望 久 太 郎
 女子大学教授

学位請求論文審査要旨

上田秋成は日本近世文学史上極めて重要で異色の作家である。その怪異小説は特に異彩をはなつ。しかし彼は小説作家であったばかりでなく、国学の学究であり、和歌にも巧みな歌人であり、煎茶の道に精通した趣味人でもあった。その生き方は個性的で自由で、近世後期の代表的な文人の一人というべきであろう。作家上田秋成を考究することは取りもなおさず彼の生き方や思想を解明することではなければならない。

従来、秋成の文学と思想のかかわりについては、彼を賀茂真淵の流れをくむ国学者として位置づけ、晩年の作品には国学的見地に基づく反儒教・反仏教的思想が濃厚であるとされてきた。それに対し論者は疑問をいだき、秋成の儒仏二教観に視座を定めて、彼の思想と文学を解明しようとする。そして秋成青年期から晩年に至る一々の作品について丹念に分析し、かつ彼の参禅の事実などから、当時の仏教界を批判こそすれ、根底には儒仏二教を責善と無為の道として肯定的に捉えていたとする。これは上田秋成観の根本にかかわる重要な新しい研究、提言というべきであろう。論者は精密な分析と明快な論理で、論を展開する。

論文内容の要約

論文は、第一篇・第二篇・第三篇と付論より成る。第一篇は序論で「上田秋成の境界」と題する。第二篇は総論「上田秋成の文学と思想」で、第一章「秋成と国学」、第二章「秋成の儒・仏二教観」、第三章「秋成晩年の境界と文学の思想」の三章にわかれる。第三篇は各論で、第一章「初期浮世草子と仏教」、第二章「雨月物語と仏教」、第三章「春雨物語と儒・仏二教」の三章から成る。付論には「秋成文学とその周辺」という総題のもとで十編の論文を収める。

第一篇の序論「上田秋成の境界」では、彼の文学と思想を理解する前提として、その境界が考究されている。秋成の生涯は、彼自ら「老懶元来、不遇薄命、実父生死不知、実母一面耳」「無父、不知其故、四歳母亦捨、有伴上田氏所養(略)、性多病、時発驚癇」と記しているように、出生よりして数奇である。青年期、浮世草子に筆を染め、国学に志し、読本を書き、ときに医の道に志して生計をたて医療に失敗、隠棲する。妻と永別した後の晩年は貧しく孤独な生活を京都でおくる。このような境界が秋成の作品や思想の形成に大きくかかわりをもっていると考えられる。

第二篇の「上田秋成の文学と思想」は総論で、本論の中心であり帰結が述べられる。第一章「秋成と国学」、一般に秋成は、真淵の『国意考』などに明らかな国学の儒仏批判に基づいて自己の儒仏二教観を樹立したとされている。しかし真淵・秋成両者の見解は基本的に異なる。真淵は、儒教の五常の道を天地自然の道理に反して樹てた人為とし「かへすがへす儒の道こそ其国をみだすのみ」と根底から否定する。秋成は、孟子の禅位篡立論には批判的であるが、孔子の説く道は「人の心を善に揉る道なればよし」と肯定的に受けとめる。仏教について、真淵は「誠の仏心」を評価しつつも、仏道による人心の愚昧化を批判する。ただし為政者の側に立てば愚民政策の一環として儒教ほどの災いではないと許容する。それに対し、秋成は「仏法は大慈悲の志願なれば貴むべし」と仏教尊崇の立場を明らかにし、仏教は禅・浄ともに、「有を棄て無に帰在せよ」という出世間の道であるとする。その上で、信仰の形骸化・世俗化を厳しく批判しているのである。真淵・秋成二人の儒仏二教観の間には明らかに一線を画すべきものがあるといえよう。

秋成はまた本居宣長の国粹的見地にたつ排儒仏の姿勢に対しても「儒仏二

教も土地にふさはしからずば、培養するとも生育すべからず」といい、儒仏のわが国に盛んなのは国土にふさわしいからである。従ってあえてそれを止むべきではないと批判する。秋成は、はじめ国学に学び、後には独学をもって、国学とは別次元の学問、思想をもつに至ったと考えられる。

第二章「秋成の儒・仏二教観」、秋成の論説・随想および文学作品を検すると、秋成の儒仏二教についての見方は、それぞれの本質を責善と無為を説くものと捉え、かつ二教はともに長い伝流の過程において教説多岐化し本質を忘れ、あたかも知略と情欲を助長する道法のごとく喧伝されてきているとする。当時、大阪の学者富永仲基は、その著『出定後語』などの中で、世上一切の道法は、前の説の上に出ようとして新しい説を加えつつ増益する「加上」の法則に従うもので、儒仏二教もその例外ではない。すなわち現今の仏教は釈迦本来の生死解脱以外の教説を多く含み、儒教も孔子本来の責善以外の教説を含むとし、その事実に関する後人の不明を批判する。儒仏二教の本質と属性に関する秋成の見解は、仲基の論説と類同する。それは決して偶然ではないであろう。秋成は、仲基没後のことであったかと思われるが、養父茂助の勧めで、仲基ゆかりの懷徳堂に通う一時期があった。秋成は『胆大小心録』の中に、しばしば懷徳堂のことにふれているのである。

第三章「秋成晩年の境界と文学の思想」は、秋成晩年の、主に和歌に投影する自照の真情をさぐる。たとえば「披き見ばふみもまどひとりぬべしおもひさだめんこころひとつに」などには明らかに宗教的・仏教的思想を見ることができるとする。

第三篇各論においては、秋成の文学作品に描かれた儒・仏二教のあり方と、それを支える彼の儒仏二教観を具体的に検討し、第二篇総論の裏づけとする。

第一章「初期浮世草子と仏教」、秋成初期の作品『諸道聴耳世間猿』『世間妾形氣』の二部の浮世草子について考察する。この二部の作品には、当世仏教信者や僧侶たちの生きざまを話柄に選んだものが多い。その大半は仏教者の日常を否定的に描いたもので占められているが、なかには全く対蹠的に、仏教信仰を人生のよき道しるべとして生きる庶民の姿を肯定的・賛美的に描いた作品もある。それらは(1)在家の仏教受容の態度を否定的に取り扱ったものの、(2)出家の否定的一面を描いたもの、(3)当時における卑俗化した「出家」の事情を伝えたもの、(4)作中人物の仏教信仰を肯定的に位置付けているものの四類型に分類することができよう。これらを通覧すれば、秋成の当世仏教

のあり方に対して如何に関心が深かったかが知られよう。

第二章においては、『雨月物語』と仏教について考察する。作品「青頭巾」では禅に関する秋成の知的理解の深さが見える。愛欲から鬼と化した僧が一禅師の化導により心をあらため、「江月照松風吹、永夜清宵何所為」の「証道歌」の二句を授けられ「徐に此句の意をもとむべし、意解ぬる則はおのづから本来の仏心に会ふなるは」と教えられる。そして、死してもなおこの二句を誦していたが、禅師の禅杖一撃で、いわゆる瓦解氷消、一瞬の裏に迷・悟の境を断ち、全く「無」の境界に直入する。「浅茅が宿」では、最後に漆間の翁を登場させ、念仏する場面を描く。法然上人の姓を漆間氏とすることによるのであろう。この一篇の背後には浄土思想に対する心情的理解の細やかさが潜在すると見ることができる。「夢応の鯉魚」には放生思想への関心と理解の深さとを読みとることができる。総じて『雨月物語』執筆の壮年期の秋成には、特に一宗派に限るのではなく、広く仏教全般にわたってかなり深い理解があったと考えられるのである。

第三章では、反儒仏思想の表明された作品と評されてきた晩年の『春雨物語』の「二世の縁」「血かたびら」「天津処女」「宮木が塚」や「死首のゑがほ」「樊噲」について検討する。これらのうち「二世の縁」は取りわけ排仏色の濃い作例として注目されている。が、この一篇は、現在の生活を粗末にして来世の安楽を願うだけなら、宗教としての価値はないとする秋成年来の識見を、地中入定僧の蘇生後の生きざまと、これを目のあたりにした村人たちの仏教信仰の動揺、という物語的虚構に託して表明したもので、決して仏教そのものを否定する立場から書かれたものでない。この種の仏教信仰を批判的に描いた作品は、早く彼の浮世草子の中にも見られた。すなわち「二世の縁」は、国学思想にかかわりなく、国学の洗礼を受ける以前から抱きつけていた仏教信仰の卑俗化に対する批判の延長なのである。「血かたびら」「天津乙女」の二篇は、平安初期の儒仏二教は、奈良朝について二教本来の精神に乖離し、次第に政治上の智謀・術策の具と化したとする秋成の史論を基調とした歴史物語であって、国学の国粹観念に基づく儒仏批判と同断のものではない。『春雨物語』最終話の「樊噲」は、秋成が『雨月物語』以来追求しつづけてきた「心放せば妖魔となり、収むる則は仏果を得る」という仏教の人間観の作品化である。大蔵といい後に樊噲などと自ら名のる膂力豊かな無頼の徒が、悪道遍歴の果てに一仏道者の行為にうたれて発心し、陸奥の

古刹の大和尚となる。そして「釈迦・達磨も我もひとつ心にて曇りはなきぞ」と、わが発心への歷程を侍者らの乞う遺偈がわりに語り尽し、大往生を遂げる。この物語の結末は、明らかに禅（仏教）の本質を肯定する立場から描かれている。また「宮木が塚」の一篇は、宮木という薄倖の遊女が、あさましい苦界の業縛を断ちきるために、法然上人の化導にすがり入水往生の道を選ぶという内容である。この物語の結末も念仏（仏教）を肯定する立場から描いているというべきであろう。『春雨物語』を国学者秋成の仏教批判の作品と見る立場からは、「焚燐」「宮木が塚」などの結末は、物語構成上の必要から仏教を効果的に利用したにすぎないとの説明がなされている。しかし「石にきるあさなゆふなの油火のあかきを頼む後の世の為」「みほとけの教へをきけば春待つもつくれるつみのかずにざりける」などの晩年の詠歌に認められる仏教帰依の真情、また西福寺玄門和尚との親交、南禅寺での参禅の事実などを考えてみれば、単に物語構成の必要からというのではなく、秋成の仏教的境界への志向に支えられたものがあるといわねばなるまい。

以上の諸点を総合すると、秋成の思想を国学的思想であると固定的に捉えることは誤りで、彼はむしろ儒仏二教の本質を理解し、それらは人として依るべき倫理・宗教であると肯定する立場であるといえる。上田秋成を儒仏二教を排斥する国学者とする考えは修正されるべきである。秋成晩年の作品は、すぐれた仏教文学として評価しうるのである。

なお、付論として収める「山霧記における石霜禅師逸話についての覚え書」「胆大小心録にみる建仁寺楞足の俊長老について」「秋成と嵯峨三秀院」などの諸論考の多くは、秋成と、仏教との関係を解明するための基礎的事実に関する考証なのである。

審査結果の要旨

上田秋成の文学と思想とのかかわりに就いては、問題とされだしてからすでに久しい。賀茂真淵の国学の流れをくみ、儒教・仏教に対して批判的・否定的だったとするのが、現今では通説となっているといえよう。それに対し、本論文で論者は、その点を再検討すべきことを力説し、検討の結果、秋成は儒仏二教に関し、その本質を理解している。秋成の文学、就中『雨月物語』の「青頭巾」、『春雨物語』の「宮木が塚」「焚燐」などはすぐれた仏教文学であると。また、論者は秋成の文学を構成する思想的要素を精密かつ

実証的に考究し、妥当な新見を述べているのである。殊に秋成の仏教観は、ほぼ同時代の大阪の思想家富永仲基の学説に近く、恐らくその影響を受けているだろうとする見解は、論者の創見の一つとして特記してよい。付論として収める諸論考の多くも、貴重な資料に基づく周密な考証で、いくつかの創見と清新な論とが見られる。しかし、上田秋成の文学と思想を考察するという本論文としては、儒仏二教観に問題をしぼりすぎている憾みがないではない。秋成の文学や思想を考察しようとするとき、広く近世の文学・思想の流れなども考慮に入れて、多角的・総合的に把握することが必要であろう。また秋成の肯定的仏教観は信仰からきているものかどうか。秋成に現象批判をさせた当時の仏教の状況に対するもっと詳しい把握と分析も必要であったであろう。さらに伝記的研究を行なうに当たっては、自己観照を中心に、体験と思想形成に関して考察する必要があるであろう。以上の点、本論文では配慮が十分であったとは言いがたいのではないと思われる。

しかし、それらの点は本論文の真の価値を減ずるものではない。論者はここで、上田秋成研究で、ほぼ定説化している秋成仏教否定論者（国学者）説を批判し、緻密な作品分析と伝記的考察から秋成の真意は仏教肯定にあったとする新見を提示している。恐らく今後の秋成研究は、この所説をふまえた上でなければ前進しえないであろう。本論文は秋成研究に新たな方向づけをなした論として高く評価される。論者には、精密で実証的な研究を行なう十分な能力があり、それを証する研究業績がある。文学博士の学位を授与するにふさわしいものと判定する。

最終試験及び語学試験の結果

この論文の内容およびそれに関連する事項についての試問、並びに語学試験の結果、本論文提出者には学位規定の定めによって必要とされている学力を有していることが確認された。

氏 名(本籍) お がわ いち じょう
小 川 一 乗 (北海道)

学 位 の 種 類 文学博士

学 位 記 番 号 乙第24号

学位授与の日付 昭和61年 3 月12日

学位授与の要件 学位規程第 3 条第 2 項

学位論文題目 (主論文) 月称の空思想

(副論文) 空性思想の研究

論文審査委員 (主査) 文学博士 櫻 部 建
教 授

(副査) 文学博士 鍵 主 良 敬
教 授

(副査) 教 授 訓 覇 嘩 雄

(副査) 文学博士 安 井 広 済
名誉教授

学位論文審査要旨

〔論文内容の要約〕

本論文は、空性思想が中観派学僧月称の上にどのように成熟しどのように体现されているかを理解し、その中観論の思想的特色を究明しようと、試みたものである。

本論文の主要な資料となったのは、第一に月称『入中論』第六章、それに対するジャヤーナンダの疏、ツォンカパの疏である。その訳読が副論文を成し、それが本論文第一——第五章および結章の主な素材になっている。第二に『入中論』第一章の最初の部分とそれに対するツォンカパ疏である。それは本論文第五章の一部および第六章の素材となっている。第三に『入中論』第十一章の末尾の部分、そのジャヤーナンダ疏、同じくツォンカパ疏である。その訳読が本論文の第七章を成している。なおそのほかに、月称『中論釈』、『入楞伽經』、プラジュニャーカラマティ『入菩提行論釈』などがある。これらは本論文の随処にその引用が挿まれている。

序章において筆者は説く。——月称は、仏護を承けて竜樹の空説を大成した「最もラディカルな中観者」で、当時興隆していた論理的傾向を批判して、

竜樹の真意を継承した人と見るべきであり、チベット仏教の伝統においてもまさしくそのように受取られている。『入中論』は月称の主著であり、それは人をして「中論に悟入せしめん」という意図をもって著された。その中心は第六章にあり、そこでは人法二無我が解明され唯識批判がなされている、と。

第一章において筆者は『入中論』第六章に見える月称の中観説の特徴を三項に要約する。それはまず(1)事物の実体視の徹底的排除、「絶対否定」の立場（相手の過誤を指摘してその主張を否定するが、それによって相手の主張とは異なる自らの主張を立てることをしない）である。(2)かく、いかなる定言をも立てないから、それは存在と非存在との二辺を離れた中道であり、あらゆる自性の不生を特質とする空性である。(3)したがってそれは、空性によって諸法が空とせられるというのではなく、諸法そのものが本来空である（本性空）とする立場である。

第二章では『入中論』第六章に見られる他学説批判の中(A)唯識説批判（それは月称の諸著作の中『入中論』にのみ見える）と(B)スヴァータントリカ批判を取挙げて、順次検討する。(A)においては依他起性・アーラヤ識・唯識無境・自証智などの唯識的観念についての月称の批判的論点を明らかにし、また唯心の教説に対するその中観的解釈を紹介する。そして、月称が唯識無境説を批判するのは対親観批判であり、アーラヤ識における識転変説や依他起性における自証智を批判するのは対陳那・護法批判であるが、月称の世俗諦理解は安慧のそれに近いのではないか、という注目すべき見解を述べている。(B)においては、その基本点が清弁と月称との二諦説に対する解釈の相違にあると指摘し、まず、勝義諦理解に関する両者の相違とそれに基づく月称の清弁批判の論点五つを挙げて考察している。

次いで第三章において、世俗諦について、月称の解釈の特異性を清弁のそれと比べて究明する。筆者によれば、月称にとって勝義諦が唯一の諦である。そして、世俗諦とは、凡夫の虚誑なる見の境界が、明浄な六根を有する者の起こす正しい認識である限り、世間なるものとして諦（世間の人々によって諦として固執されたもの）なのである。執することなき聖者にとって、世俗は諦でなく、唯世俗である。そこでは、言教の二諦説という意味での世俗諦が認められながら、その世俗諦はどこまでも自己否定さるべきものであるという中観説の基本的立場の確認が見られる、というのが筆者の見解である。

第四章では所知障の観念がとりあげられる。竜樹造の他の諸論に所知障へ

の言及がない点から『入中論』に見える所知障の解釈が筆者によって特に注目された。唯識派が、法執すなわち所知障すなわち不染無知とするのに対し、月称は、法執は染無知であり煩惱障であってそれはすなわち人法二我執であるとする。だから、月称によれば、二乗が煩惱障を離れるということは、人我のみならず法我をも離れることである。もっともその法無我の修習はそれだけでは未だ円満には至らない。法無我の完遂は所知障の断によるのだからである。してみれば、所知は唯識派にとって知らるべき真実、月称にとっては遍断さるべき世間である。所知障は、前者にとって所知（真実）に対する智の活動を障げるもの、後者にとっては所知（世間）を遍断することを障げるものである。所知障の断は、前者にとって後得清淨世間智の実践、後者にとっては勝義無、無顕現の完遂（空性を空性と知りきること）、すなわち自内証智の生起である、というのが筆者の論究の所詮である。

第五章は、法無我についての月称の独特な考え方をさらに詳論する。月称によれば、十地の第六地までは菩薩は二乗を越えていないのであり、第六地において二乗も菩薩もともに般若波羅蜜を修して法無我を了解する。法無我の了解なくして人無我の了解はあり得ないからである。月称は法無我を「通仏教」（三乗に通ずる）と見ている、と筆者は説く。

第六章において筆者は論ずる。——『入中論』の劈頭の部分は、大乘者が「大乘としての仏道体系」を自覚するという点に関して、重要である。ツォンカパはその部分を「大悲を讃嘆する」および「大悲を敬礼する」記述と見ているが、月称によれば、菩提心（自ら空性を知り他をしてそれを知らしめようとする心）と無二智（有無の二辺を離れた般若）と大悲心とが菩薩の因であって、その中、大悲心こそがすべての根源である。大悲心という種子から菩提心なる芽が生ずるのであり、大悲の生む果実が次々と新たな仏道の因となって限りなく空・般若（無二智）の実践が広がる。大悲が菩提心と無二智としてはたらき出るところに、菩薩の実践の道としての大乘があるのであり、大乘の仏身観も仏性思想も浄土思想もそこに基を置く、と筆者は見る。

第七章の内容は『入中論』全篇の最終部分を成す五偈とその釈との訳読である。そこでは、まず『入中論』述作の態度が明かされ、次に述作した功德の廻向が願われ、最後に、甚深なる空性と広大なる波羅蜜とを明らかにしてゆるがぬ智慧と慈悲とをもって有情の諦執を滅した旨が述べられて、『入中論』が結ばれている。

結章では、月称独特な世俗観として唯世俗という考え方の意味が強調されている。筆者によれば、それは月称の中観説が大乗菩薩道との関わりにおいてこそその思想的意義をもちうるということである。

以上九章より成る本論文の末尾には、その第二章に対する附論ともいうべきものとして、ツォンカバ疏の一節の解説が添えられている。

〔審査結果の要旨〕

本論文が主要な資料とした『入中論』およびそのジャヤーナンダ疏は、いずれも原文を欠き、ただチベット語訳をとおして読解するほかはないという困難な条件にある。したがって、筆者の読み方にいくぶん疑問と思われる点や訳文の意味のとりにくい部分はなしとしないけれども、この種の論釈についてこれだけ纏った分量を読み下して発表したのは学界最初の業績であり、その労は多とすべく、その功は大きい。ツォンカバ疏もまた筆者によって初めてくわしく紹介されたのであり、それはチベットに受容理解された中観学説の研究として長尾雅人『西藏仏教研究』（昭和29年）以来の業績となろう。

論師月称の思想史的位置や『入中論』およびその第六章のもつ意義についての筆者の見解、『入中論』第六章の内容を法無我・人無我・空性の三主題によってとらえた仕方、そこに見える中観説を三項に要約した仕方などは、いずれも妥当なものと考えられる。月称の唯識説批判についてはよく箇条的に整理していて、解り易い。

法執すなわち染無知すなわち煩惱障であり二乗が煩惱障を離れるのは人我のみならず法我をも離れるのであるという特異な月称の学説を唯識説との対比によって示し、したがって法無我は三乗に通ずるという月称の主張を明らかにしたのは、一つの貢献である。「唯世俗」の観念について詳説し月称学説として従来あまりよく知られていなかった面を紹介したことと共に評価されるべきものと考えられる。

『入中論』の最初の部分で月称の説くところは、衆生縁・法縁・無縁の大悲心が菩薩の因であるというにほぼ尽きると思われるが、筆者は、その菩薩の大悲心の観念と仏教者の歴史観という問題とを結びつけて、独特な見解を力をこめて開陳する。甚だ興味深い。それは、世俗諦はなくて唯世俗であると説く月称の立場が「実践道」的である、とする筆者の主張に連なるものであり、「大乘としての仏道体系」という考え方が常に筆者の念頭にあったこと

を示している。

本論文を通じて、月称の教学説は種々の角度から究明せられた。その貢献は十分に認められるべきである。ただ、筆者が、ツォンカバの理解に拠って『入中論』を理解する方向をとったことから、その所論が、時には、筆者による月称『入中論』の所説の究明というよりもむしろツォンカバの『入中論』理解の筆者による紹介というべきものとなり、あるいは月称—ツォンカバ中観説の解説というべきものとなっている点もある。

清弁説と対比して月称説を闡明しているところには、両者の相違点を強調するにやや急であって、中観論者としての共通の立場に筆を割くことの少い憾みなしとしない。また、筆者の清弁学説の理解については多少あきたらぬ点が認められる。清弁の用語 *tathyaśamvṛti* を *bhūtaśamvṛti* の意に理解した点、清弁のいう勝義の勝義諦を「空性そのものとしての離言真如すなわち出世間無分別智」とのみ理解した点などから、世間的勝義諦・清浄世間智・実世俗・世俗有などの観念もやや本義とずれた意味に受けとられた節がある。

『入楞伽經』偈頌品第四二九偈が重要な資料として引かれるが、その場合、經の梵文、經のチベット語訳、ツォンカバ所引のチベット文の三本の間に異同のあることに注意しなかったような、文献学的作業の厳密性の不足が見られないでもない。

しかしながら、右のような瑕疵は、日進月歩のインド仏教研究の現況の中に身を置く筆者にとって、やがて十分に補正しうる程度のものと考えられる。

以上により、本論文は文学博士の学位を与えるに価するものと認められる。

〔最終試験及び語学試験の結果〕

この論文の内容及びそれに関連する事項についての試問、並びに語学試験の結果、本論文提出者には学位規定の定めによって必要とされている学力を有していることが確認された。

氏 名(本籍) 平 野 顕 照 (滋賀県)

学 位 の 種 類 文学博士

学 位 記 番 号 乙第25号

学位授与の日付 昭和61年3月12日

学位授与の要件 学位規定第3条第2項

学位論文題目 唐代文学と仏教につきての研究

論文審査委員 (主査) 文学博士 山 本 唯 一
教 授

(副査) 教 授 藤 原 利一郎

(副査) 文学博士 北 西 弘
教 授

(副査) 文学博士 花 房 英 樹
講 師

学位請求論文審査要旨

唐代の文学は、それまでの文学がそこに収束し、それからの文学がそこから流出する大潮に似て、中国文学史上特異な意義をもっている。それは一見しても多様性をもって豊富であり、内面を探れば思索性を獲得しているからである。その思索性についていえば、もともと文学を荷う人間が、儒教・道教、さらに仏教をも組みこんでおり、ためにそれらの人間の制作する詩文に、濃淡の差こそあれ、思想が投影することとなったのである。そのうち儒教や道教の投影は、ある程度に吟味されている。ただ仏教については、未だに不十分といわねばならない。それは文学の研究に従事する者が、異った体系をもつ仏教に近づき難かったからである。しかし仏教との関係が究明されなければ、文学の理解も不徹底とならざるを得ない。いまや特定の枠組の中に止めることは許されなくなってきた、枠組を越えた新しい研究の地平を開くことが要請されている。この学界における要請を自己の課題としたのが、ほかならぬ本論文である。本論文は、文学を荷う人間と、それが産出した作品とが、仏教とどのように係り合っているかを、具体的に考究しようとするものと見られる。

〔論文内容の要約〕

本論文は三つの編より成る。第一編は、唐代文学と仏教についての概論であり、第二編は各論である。第二編たる各論では、第一章で白居易をとりあげ、第一節「白居易の文学と仏教經典」、第二節「居士を表明する白居易詩」、第三節「白居易の齋戒詩」、第四節「白居易が接した広宣上人像」、第五節「白居易詩にみられる道情」、第六節「幽独に託する白居易の詩情」と第七節「大乘本生心地観経と白居易」の七節にわけて論述する。第二章では李白をとりあげ、第一節「仏教に起因する李白の不遇」、第二節「青蓮居士の名称と釈教碑」、第三節「仏教を含む李白の詩」及び第四節「答湖州迦葉司馬問白是何人詩について」とする。第三章は李商隠である。第一節「李商隠の仏教受容の実態」、第二節「仏教を含む李商隠の詩」、第三節「李商隠と高僧知玄」である。第四章は唐代の俗文学と仏教について考察する。第一節「講経文の組織内容」、第二節「敦煌の仏教文学小考」、第三節「敦煌本無量寿経五惡段について」の三節から成り、最後に総括として第五章が設けられる。第三編は唐代文学の文事について論述する。第一章「臨終詩論」、第二章「釈教歌名称の源流」、第三章「歩虚詩と足歩虚空」の三章である。なお以上の本論のほか附編として「顔真卿の文芸と仏教」「刺血写経とその変遷」等六篇の論考が添えられている。

対象とされた唐代の文学は、文辞と詩歌の両面において、いずれも大きく発展した。ただしその発展を推進したのは、ほかならぬ詩歌であった。ためにその詩歌は、中国文学史において「唐詩」と特称されるほど充実し、民族の詩的才能を尽すようにも見えるものである。かくて本論文は、詩歌を対象としたのであろう。ただ仏教との係り合いという主題から、詩人と僧徒との贈答唱和の制作と限定している。これも一つの見識にもとづくものと言えよう。

ここに先ず「詩人」と自他ともに許し「居士」を自称する白居易が採り上げられる。もともと居易は官僚として常ならず長い生涯をおくり、「三教論衡」の司会に当てられたように「儒・道・仏」に通じた人物である。「詩人」たることと併せて、まさしく唐代における士人の典型ともなり得る。その居易の文学的人間形成の過程と仏教との関係を究めることは、広く唐代の文学を荷う人間と仏教との係り合いを象徴するものとして、「概論」に適切と認められる。その初めは、儒教の立場に在る官僚と仏教の教養とにしほり、次に

官途の挫折による悩みから、仏教に精神の安定を求めたと見定め、終りに官界を越えて仏教体験を深め、魂の救済を念じたと結ぶ。具体的に詩歌を吟味しつつ、仏教に焦点を置いた居易の人生行路を追究している。すでに達成されている基礎研究によりつつも、文学形成の過程とは異なる、仏教者としての側面に光りを当て、従来では十分に意識されなかった内面的な人間像を提出している。

「各論」では一步を進めて、求道のために対象としたさまざまな仏教經典を、詩歌のみならず文辭からも拾って、それぞれの經典を吟味する。そこに教理に対する関心や教養の範囲、さらには信仰の方向さえも導き出し、仏教精神に通暁すべく努力したことをいう。ただし居易の仏教は、知的関心に止まらず、体験による自証にまで進んだことをも論ずる。「斎戒」についての、数少くない詩篇を取り上げるのがそれである。かくて斎戒をきびしく守り続ける体験の中から、信仰が深化したことを示す。また若いころからの「居士」への志向が、次第に熟してゆき、ついに自ら「香山居士」と称するに至り、仏教者としての自覚に達したことをいう。ただしその居士に止っていたのは、自らの中の文学衝動と仏教者としての信仰の均衡をはかる心況によるものと解釈する。さらに「道情」「幽独」など、居易の愛用する語を手掛かりに、居易の人間・文学と仏教との係りを広く深く究明している。これらの論考は、仏教の体系と体験とを持つ者によって、初めて解明された見解というべきものであろう。

次に居易の生きた中唐に先ずる盛唐期に活動した李白が考察される。白は「謫仙人」と称せられるほど、道教の人間と見なされている。まことに白は、例えば呉筠のような道士と深く交り、道教意識を仄めかせる発想が詩文にもしばしば見える。ために道士的な一面が強調され、ともすれば仏教者としての側面が覆われてきた。しかし白はもともとその周囲に多くの僧徒をもち、しかも彼等との贈答詩も少くなかった。また仏教的な高度の教養をも身につけ、詩文には仏典に根拠をもつ言葉をしばしば用い、ついには道教の用語を仏教に転用してもいた。これらから見れば、白は仏教的超越感を内心に観得していたといえる。さらには「青蓮居士」と自称するほど、仏教を精神の支えとしていたことも知れる。このような点から見れば、白はたしかに仏教に深く関心を有する人間である。とすれば、従来の白の人間像は修正されなくてはならず、その文学も再吟味の必要があると提議する。

続いて白居易の後輩に当る、晩唐期の李商隱が採り上げられる。商隱の周囲には、仏教の理論に強い知玄を始めとして、仏教に関心を懐く多くの人々がいた。ために早くから仏教に関する教養をもっていたが、牛李の政争の狭間に落ちて抜き差しならぬ苦しみを味い、家族的な不幸を背負って、仏教への傾斜は年ごとに深くなって行き、求道はいよいよ熱烈となった。ために商隱の文学は内面的となり、寓意を含むものとなり、時には自ら口を閉じることさえもあった。武宗の廃仏のころ、ようやくに下級官僚の職についたが、政治の仏教迫害についても、自ら発言を避けねばならなかった。そうした苦渋を逃るべく、詩歌の制作と仏教への傾倒に、時間を見出していたのである。商隱の文学は、深い所で仏教と係っていると論じる。

盛唐から中唐を経て晩唐に至るまで、教養ある士人の間には、仏教の関心がかなりにあった。このように社会の指導層にぐい入った仏教は、そのまま広く各層に浸透してゆく。これを推し進めたのが「俗講」である。「俗講」はもと「経疏」を根柢とする仏典講説たる「講経」の変形であり、散文・韻文の組合せを連鎖する特殊な形式を発展させて、文学的興趣を高揚させる形態であると主張する。やがて音楽的要素を導入し、さらに絵画による視覚的要素をも加え、ついに寺院を出て庶民の娯楽へと転化するに至ったと、いわゆる通俗文学としての「変文」の成立過程を論定している。そしてこのような通俗文学こそ、次代の話本や小説の源泉となるとも指摘している。

〔審査結果の要旨〕

総じていえば、唐代において、仏教は多くの人々に受容された。士人に仏教的教養が浸透するにつれて、儒道の二教が解決し得なかった問題に、一定の解答を導くよすがを与え、世界観や人生観にまで影響を及ぼした。ことに文学に従事する人々には、新しい題材を見出させ、従来なかった発想を開かせ、表現を豊富にさせもし、文学そのものを発展させることとなった。さらには仏教文学を自ら展開し、やがては民間文学を産出する根源的な役割を荷い、とくに講唱文学に至っては、いわゆる通俗文学の方向を示唆し、日常語による表現形態さえも採り上げる道を開いた。このように仏教は文学へ大きく貢献したと結論する。それは本論文の方法が、仏教の側から文学を考察するという傾向を常に持続けたからである。かくて唐代文学と仏教との関係について、従来見なかった成果に達し、さらには文学研究の新しい方法を開

拓するという意義をもつに至ったとも言い得るであろう。

ただしときに仏教に重点がかかり過ぎると、いささかの当を得ぬこともでてくる。その一は、全体の構成に関することである。例えば第二編第一章「白居易の文学と仏教」における第四節「白居易が接した広宣上人像」である。内容からしてここに組み込まれる必然性が乏しい。のみならず構成に緊密性を欠くこととなろう。

また仏教の立場では自明のことであっても、論理の展開のために、さらに補説を必要とすることもある。例えば第一編第四章に見える、「今生の世俗の文字、放言綺語」が、どうして「将来世世に、仏乗を讀じ法輪を転ずる」因となり得るかである。広くいえば、業としての文学と仏の救済との問題であるからである。加えていえば、「五」に見える、「白居易の文学が平易であるといわれる根源」に「仏教の作用がかなり比重を占める」ということである。文学の個性と仏教の作用との関係もここでは十分に理解し難い。解明すべきことは他にもある。第二編第二章において、道教と仏教、それに儒教などが、「彼の精神生活上に混在」しているというが、李白の本質的なものはどこに在るのであろうか。さらにいえば、第二編第三章における、李商隠の、「廃仏」について「作品を提示しない」理由は何かということである。ここに挙げられているだけでは、十分に理解し難い。

もとより論文の常として、詩句の読み方についても問題がある場合もないではない。このようないささかの不備はあっても、本論文は、その初めに立てられた限界内において、十分な成界に達したものと判断し、文学博士の学位授与に価するものと判定する。

〔最終試験及び語学試験の結果〕

この論文の内容及びそれに関連する事項についての試問、並びに語学試験の結果、本論文提出者には学位規定の定めによって必要とされている学力を有していることが確認された。